

TO 報道関係者各位

FROM 奥能登国際芸術祭実行委員会



Photo: Naoki Ishikawa

奥能登国際芸術祭実行委員会は、2017年9月3日(日)から10月22日(日)までの50日間、第一回となる「奥能登国際芸術祭2017」を開催します。

能登半島の先端に位置する石川県珠洲市。古くから海と陸の交流が盛んに行われ、特異な文化が育まれた珠洲は、地理的に孤立していることから、日本文化の源流ともいえるべき昔ながらの暮らしや風習がいまでも残る町。“忘れられた日本”がそこにあります。連日のように「キリコ祭り」が行われ、奥能登が一年で最も活気づく秋に開催される「奥能登国際芸術祭2017」は、伝統文化と最先端の美術が響き合うアートの祭典。国内外から参加するアーティストと奥能登珠洲に眠るポテンシャルを掘り起こし、日本の“最涯”から“最先端”の文化を創造する試みです。

<芸術祭概要>

奥能登国際芸術祭2017

最涯の芸術祭、最先端の美術

会期:2017年9月3日(日)~10月22日(日) 50日間

会場:石川県珠洲市全域

参加アーティスト:11の国と地域から39組

主催:奥能登国際芸術祭実行委員会

実行委員長:泉谷満寿裕(珠洲市長)

総合ディレクター:北川フラム(アートディレクター)

クリエイティブディレクター:浅葉克己

コミュニケーションディレクター:福田敏也

公式写真:石川直樹(写真家)

奥能登国際芸術祭
珠洲



SUZU 2017
OKU-NOTO TRIENNALE

公式ウェブサイト:<http://oku-noto.jp>

奥能登国際芸術祭開催によせて

奥能登珠洲は三面を海に囲まれ、日本海に突き出た半島です。沖には寒流と暖流がぶつかる豊かな漁場があり、半島は海に切り立って落ち、わずかな土地には漁村、塩田がひらかれ、ここに里山・里海が共存する特色ある生活と景観が生まれました。

この地理的特質により、この地は古くから大陸からの、また日本列島各地からの文、物が盛んにもたらされ、日本文化の原型とも言うべき生活が形成されてきました。

たくさんの神社、各集落で今だに熱心に続いているキリコ、燈籠山の祭り、そこで誰でも迎えてくれるヨバレの膳など、まこと珠洲は日本文化の源流がその基盤に脈打つ豊穡の地でした。

しかし20世紀、都市化が進むにつれ、豊かな生活文化をもつ地域が元気を失っていきました。奥能登珠洲はさいはての地になっていったのです。

人類が地球から飛び出せず、地理的なフロンティアがなくなった現在、グローバルイズムは都市を無個性な興奮と刺激と大量の消費の場所に変わってしまい始めました。また私たちの生活は記号の洪水のなかで情報に埋没しつつあります。そこでは五感は鈍くなるばかりです。自然や季節の移ろいと感應すべき身体は手がかかり、足場を失い、神経だけがとがっていきます。この時、「さいはて」こそが生きるバネ、人間のゆたかな活動、コミュニティのつつみこみの梔子になり始めていることに気づくのです。古くから「美術」は自然や文明と人間とのやむ

にやまれぬ、あるいは親しい関係を表してくれる手立てでした。グローバルなネットワーク社会とローカルな社会基盤の調整が必要な現在、あるいは政治的な建前と人間個々人の本能や願望がズレをもって混乱している状態のなかで、今ひとたび美術は、それらの位相をつなぐやわらかさをもって働くのではないかと考えます。

海と山、古代から現代までが混在する奥能登・珠洲という神秘でミステリアスな舞台に、第一線で活躍するアーティストが見、感じ、作ったものは、この地の特徴をあらわし、個々人のもつ豊かな感性に呼びかけ、この地に生きてきた人々の誇りを蘇らすに違いありません。さらにこの地を訪れる人々に、豊かな地がまだあることを感じさせ、コミュニティがもつ希望に触れることを可能にしましょう。

さいはての地で、希望の美術を、感じ、歩いて下さい。岬巡りに風景が乱反射し、身体が躍動する旅、それは私たちが固まった属性から離れ、来し方を考える道のりでもあります。楽しいこと、うけあいです。

総合ディレクター 北川フラム

奥能登国際芸術祭2017 参加予定アーティスト一覧

- ・浅葉克己(日本)
- ・麻生祥子(日本)
- ・アデル・アブデスメッド
(アルジェリア・フランス)
- ・アローラ & カルサディージャ(アメリカ・
キューバ・プエルトリコ)
- ・石川直樹(日本)
- ・EAT&ART TARO(日本)
- ・井上唯(日本)
- ・岩崎貴宏(日本)
- ・Ongoing Collective(日本)
- ・鬼太鼓座(日本)
- ・角文平(日本)
- ・金沢美術工芸大学アートプロジェクトチーム
[スズプロ](日本)
- ・河口龍夫(日本)
- ・キジマ真紀(日本)
- ・鴻池朋子(日本)
- ・小山真徳(日本)
- ・アレクサンドル・コンスタンチーノフ(ロシア)
- ・坂巻正美(日本)
- ・さわひらき(日本・イギリス)
- ・塩田千春(日本・ドイツ)
- ・ウー・ジーツォン(吳季璁) &
チェン・シューチャン(陳淑強)
(台湾)
- ・リュウ・ジャンファ(刘建华)(中国)
- ・竹川大介(日本)
- ・田中信行(日本)
- ・中瀬康志(日本)
- ・南条嘉毅(日本)

- ・エコ・ヌグロホ(インドネシア)
- ・Noto Aburi Project(日本)
- ・バスラマ・コレクティブ(スペイン)
- ・ひびのこづえ(日本)
- ・深澤孝史(日本)
- ・ギムホンソック(韓国)
- ・眞壁陸二(日本)
- ・村尾かずこ(日本)
- ・GYOKO YOSHIDA + KINOURA MEETING(日本)
- ・吉野央子(日本)
- ・ラックス・メディア・コレクティブ(インド)
- ・カ五山(日本)
- ・トビアス・レーベルガー(ドイツ)
- ほか

※表記は50音順

各アーティストのこれまでの作品紹介も含めたプロフィールは、以下の URL からご覧いただけます。

<http://oku-noto.jp/artists/>

奥能登国際芸術祭2017 作品の見どころ

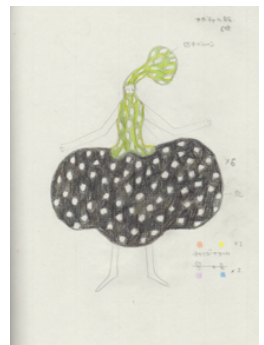
さいはて 最涯の芸術祭、美術の最先端

能登半島の先端に位置する石川県珠洲市。古くから海と陸の交流が盛んに行われ、特異な文化が育まれた珠洲は、地理的に孤立していることから、日本文化のゲイン流ともいべき昔ながらの暮らしや風習がいまでも残る町。“忘れられた日本”がそこにあります。連日のように「キリコ祭り」が行われ、奥能登が一年で最も活気づく秋に開催される「奥能登国際芸術祭2017」は、伝統文化と最先端の美術が響き合うアートの祭典。国内外から参加するアーティストと奥能登珠洲に眠るポテンシャルを掘り起こし、日本の“最涯”から“最先端”の文化を創造する試みです。

地域共同体の絆

「キリコ」と「ヨバレ」

珠洲では、五穀豊穡を祈る様々な祭礼神事が行われています。特に9月上旬から10月下旬の約50日間は、連日市内で秋祭りが行われます。神輿の足元を照らす御神燈「キリコ」やかたつて塩田を踏み固めた曳山がまちを練り歩きます。さらに、家主が自宅で御膳料理や酒をふるまう「ヨバレ」の風習が現在も行われており、アート鑑賞の後は、「キリコ祭り」や「ヨバレ」、御膳料理を楽しんでいただきます。



ひびのこづえ
旧飯塚保育所【正院地区】



金沢美術工芸大学
アートプロジェクト
[スズプロ]
古民家【飯田地区】

里山里海



眞壁陸二
寺社の船小屋【上戸地区】



中瀬康志
旧上黒丸小中学校【若山地区】



アローラ&カルサディージャ(プエルトリコ)
木ノ浦海岸【日置地区】



吉野央子
旧店舗(J U E N)【飯田地区】



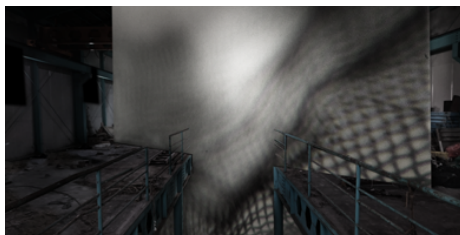
アレクサンドル・コンスタンチーノフ(ロシア)
バス停【大谷～正院地区】

奥能登国際芸術祭2017 作品の見どころ

失われた列島の生活



さわひらき
旧日置公民館【日置地区】



ウー・ジーゾン&チェン・シューチャン(台湾)
旧漁業倉庫【正院地区】



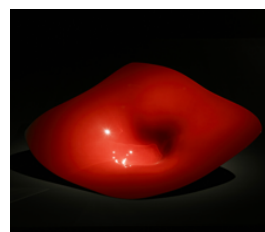
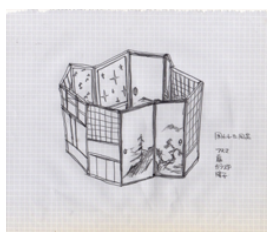
塩田千春
旧清水保育所【大谷地区】



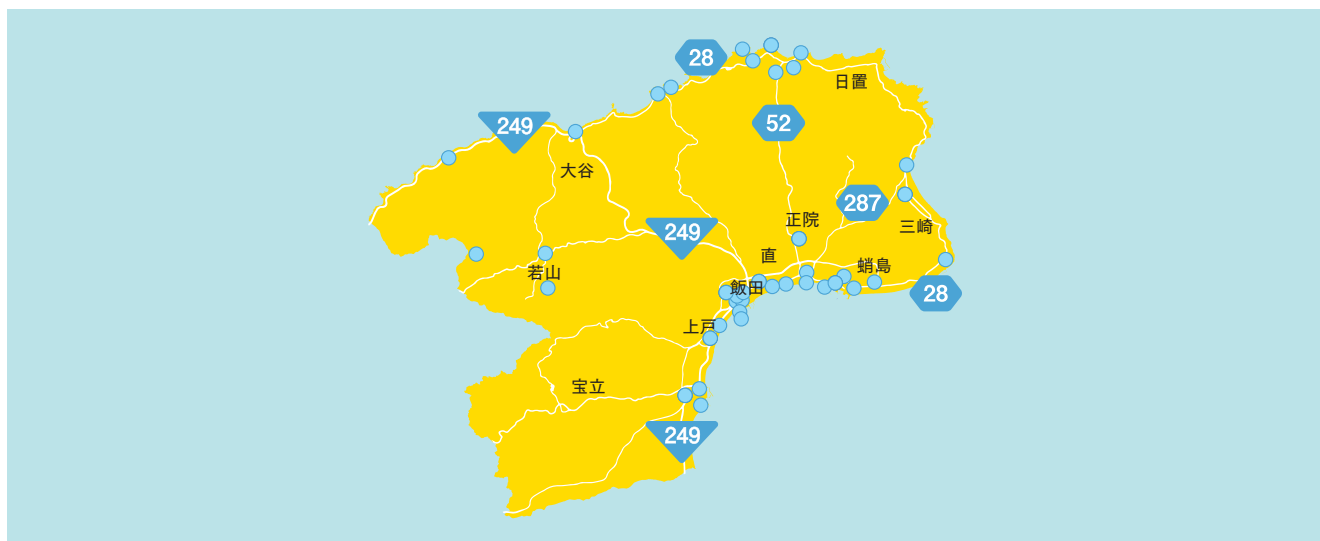
南条嘉毅
旧映画館(スメル館)【飯田地区】



岩崎貴宏
森腰の古民家【三崎】



田中信行
西中町の蔵【直地区】



つながる日本海



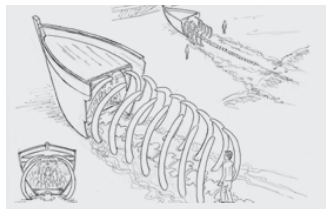
深澤孝史
笹波海岸【大谷地区】



坂巻正美
北山【若山地区】



リュウ・ジャンファ(中国)
見付海岸【宝立地区】



小山真徳
粟津海岸【三崎地区】



角文平
本江寺の倉庫【直地区】

奥能登国際芸術祭2017 作品の見どころ

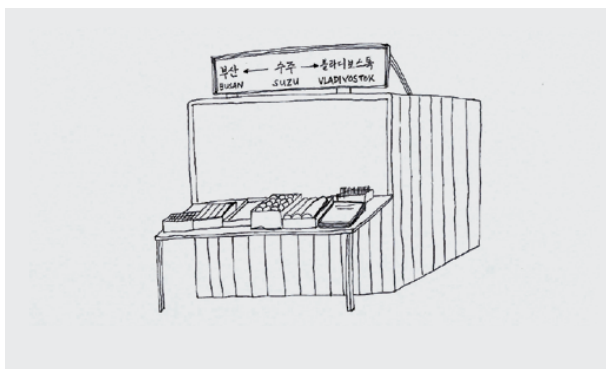
失われたのと鉄道



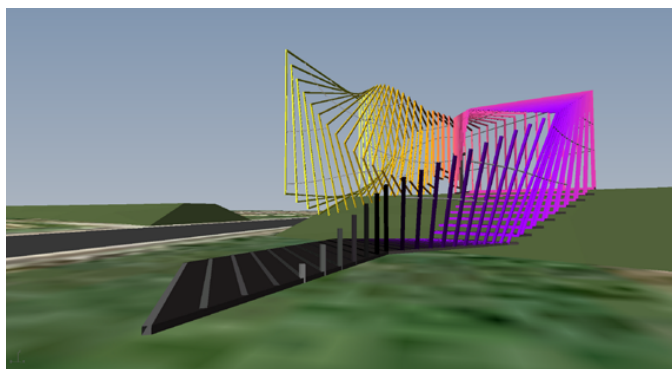
アデル・アブデスメッド (アルジェリア／フランス)
旧鶴飼駅【宝立地区】



エコ・ヌグロホ (インドネシア)
旧蛸島駅【蛸島地区】



ギム・ホンソック (韓国)
旧珠洲駅【直地区】



トビアス・レーベルガー (ドイツ)
旧蛸島駅線路敷【蛸島地区】



ラックス・メディア・コレクティブ (インド)
旧上戸駅【上戸地区】



河口龍夫
旧飯田駅【飯田地区】



最涯の地



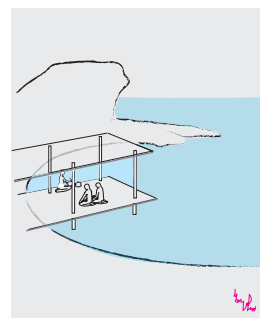
石川直樹
旧旅館 (宝湯2階)【宝立地区】



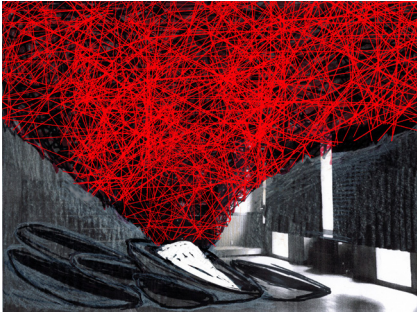
鴻池朋子
ジャク崎【日置地区】



EAT & ART TARO
旧レストラン【飯田地区】



GYOKO YOSHIDA
+ KINOURA MEETING
木ノ浦海岸【日置地区】



作品イメージ



作品イメージ

01 塩田千春（日本・ドイツ）

場所：旧清水保育所

時を運ぶ船

珠洲には廃れつつある揚げ浜式製塩法が今も残ります。戦時中、金沢の連隊に属する兵士が故郷で部隊を支援し、貴重な製塩法を伝えよと上官から命を受けたためです。このように、能登の塩づくりには現在も生きる技法と人々の物語が刻まれています。そこで、この逸話をもとにインスタレーションを制作。実際に使用されていた古い砂取船に砂を乗せ、その船の周りを赤い糸で編み込みます。旧清水保育所に展示し、幼児の記憶もつむぎます。

—

プロフィール

1972年大阪府生まれ。一昨年、「ベネチア・ビエンナーレ」で日本館の代表作家を務める。主な個展にKAAT神奈川芸術劇場（2016）など、主なグループ展に「シドニー・ビエンナーレ」（2016）など出品多数。

02 村尾かずこ（日本）

場所：赤神の小屋

サザエハウス

かねがね珠洲では、サザエ漁がとても盛んです。この地でサザエは、主にお祭りや祝い事の料理、おもてなしのごちそうなどに使われます。そんな風習に着目した村尾は、作品素材にサザエを採用。海沿いに位置する一軒の小屋を膨大なサザエ貝で覆った作品を発表します。そして、この貝の家はもちろん中に入れます。室内に足を踏み入れると、外観とはまったく異なる世界が広がります。を作る楽しさを体験するワークショップを各地で多数行う。

—

プロフィール

東京都生まれ。武蔵野美術短期大学卒業。在学中に壁画の技法であるフレスコに出合い、その後、制作活動しながら左官の仕事を学ぶ。作品発表に加え、左官体験ができるワークショップなども開催。



作品イメージ

03 深澤孝史（日本）

場所：笹波海岸

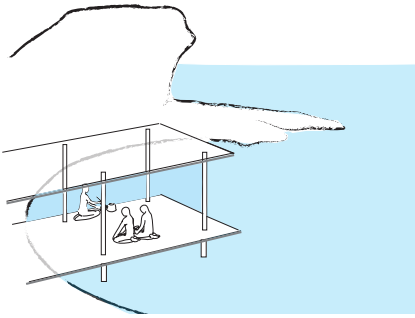
神話の続き

日本海の岸には、日々、大陸からたくさんの漂着物が流れ着きます。そのため数多くの漂着神（寄神伝説）が伝えられています。能登も例外ではなく、寄神をまつた神社や祭礼が今も残っています。こうした土地柄をもとに、深澤は作品を構想。海の波や風、土地の崇高さによってもたらされたものとして神社をとらえます。そして漂着物となった廃棄物を作品として再生し、海岸にて発表します。

—

プロフィール

1984年山梨県生まれ。場所ごとにオルタナティブなシステムを設計し、実行していくプロジェクトを各地で展開。「札幌国際芸術祭」（2014）、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」（2015）など参加多数。



作品イメージ

04 GYOKO YOSHIDA + KINOURA MEETING (日本)

場所：木ノ浦海岸

海上のさいはて茶屋

奥能登の先端に位置する木ノ浦湾。一昨年に公開された映画「さいはてにてーやさしい香りと待ちながら」は、ここで撮影されました。その撮影セットの小屋を利用した海上の「茶室」が現れます。また、千利休が茶室を「美術を企画して見せる会場」ととらえたことになり、ここをアートプロジェクトの場としても展開。コンサートやシンポジウムなど各種のイベントが、海を借景に繰り上げられます。

ー

プロフィール

1970年愛知県生まれ。多摩美術大学大学院修了。国内外で展覧会参加多数。今回は、美術家や経済学者、哲学者、炭焼き師、茶人などによるグループ「KINOURA MEETING」と共同制作を実施する。



作品イメージ

05 アローラ&カルサディージャ(アメリカ・キューバ・ペルトリコ)

場所：木ノ浦海岸

船首方位と航路

珠洲の浜辺によくあるようなボートと、ヨーロッパの大きな船にある船首像を一体化。台の上にボートを置き、動く彫刻作品として発表します。ボートは不安定な状態でバランスをとりながら、風や重力で上下左右にやじろべえのように揺れます。この船首像は19世紀末のアメリカ・スペイン戦争で米軍が使った軍艦の像がモデルです。この時、アメリカの勝利により、アーティストが在住するペルトリコはアメリカへ譲渡されました。

ー

プロフィール

1995年より共同制作開始。ペルトリコ・サンファンを拠点に、国際的に活動中。主な個展にニューヨーク近代美術館(2010)、フィラデルフィア美術館(2015)など。「ベネチアビエンナーレ」(2011)米国館代表。



作品イメージ

06 鴻池朋子 (日本)

場所：シャク崎

陸にあがる

壮大で劇的な海の表情を持つシャク崎エリア全体を使って、その海と陸の「境界」に作品を発表。鬱蒼とした林の中、道しるべを頼りに密やかな遊歩道を登ると、海と柄島が現れます。作品のひとつはその断崖絶壁ぎりぎりに、大きな角と人間の脚が合わさった奇妙な白い立体物。もうひとつは遊歩道を下った海岸の岩場に作品をくくりつけ、人間のつくる「物質」の破壊的なエネルギーというものを考えます。

ー

プロフィール

1960年秋田県生まれ。さまざまなメディアを駆使し、現代の神話をトータルなインスタレーションで表現。主な個展に「根源的暴力」(神奈川県民ホール、2015)ほか。



作品イメージ

07 さわひらき (日本・イギリス)

場所：旧日置公民館

魚話

さわは石川県生まれ。祖父は戦前、珠洲で働いた経験の持ち主。今でこそ珠洲に出かけることは陸路が一般的ですが、当時は海運業が盛んで、珠洲・金沢間は海道が主流でした。そこで本作では、陸ではなく海を中心にとらえ、海から珠洲を見たときの幻影を映像作品に仕立てます。自身の家族とゆかりのある珠洲にまつわる記憶の断片を、地域へのリサーチを通じてひも解き、実際に珠洲で撮影した作品です。

ー

プロフィール

1977年石川県生まれ。ロンドン大学大学院スレード校修了。「リヨン・ビエンナーレ」(フランス、2013)、「横浜トリエンナーレ」(2015)など国内外で活動。



作品イメージ

08 キジマ真紀（日本）

場所：日置ハウス（旧日置小中学校）

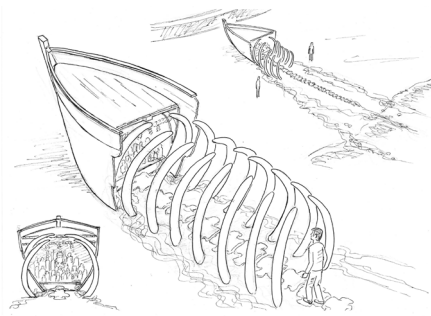
海と山のスズびらき

海開きや山開きにちなみ、《海と山のスズびらき》を展開。珠洲で暮らす人たちが、海や山にまつわる各自の記憶をもとに、ワークショップで一人一枚のフラッグをつくりまわす。そして、廃校になった学校の中庭に、数多くの旗を円形状に展示。この学校は、かつて海の道と山の道がちょうど交わる場所に位置しています。つまり、交通網が発達する以前は山と海の人々をつなぐ場所でした。この地で、海と山の記憶が出会います。

—

プロフィール

1976年東京都生まれ。東京藝術大学大学院修了。2009年から「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」に3回連続で参加するほか、スケートリンクのアートプロデュースやワークショップなど幅広い活動を展開。



作品イメージ

09 小山真徳（日本）

場所：栗津の海岸

最涯の漂着神

かつて、奥能登の浜に漂着した鯨や破船は、漁村に幸と吉祥をもたらしました。この古い言い伝えに基づいて、鯨と破船を一体化した構造物を海岸に展示。その船は、先頭部のみ船の姿を見せていますが、途中からは鯨の肋骨や背骨がむき出しになっています。またその鯨のような船の周囲には神社や祠のような立体を配置。こうした展示により、船首は社殿、肋骨は鳥居、背骨は石に見えるかのような想像力を見る者に促します。

—

プロフィール

1981年愛知県生まれ。東京藝術大学大学院修了。主なグループ展に「岡本太郎現代芸術賞展」（2014）、「中之条ビエンナーレ」（2015）、「Who By Art vol.5」（西武渋谷店、2016）など多数。



作品イメージ

10 岩崎貴宏（日本）

場所：森腰の古民家

Untitled

従来から岩崎は、使い古されたタオルや衣類の生地をほどき、その糸を編み上げてタワーや建物に再構築する作品を手がけてきました。今年の「ベネチア・ビエンナーレ」の日本館でも、その最新作が好評です。そして、今回の芸術祭では、森腰エリアにある古民家で作品を発表。もともと家に残された品々をはじめ、地域でみつけた素材をもとに再活用し、床の間や和室などを新たな空間に仕立て上げます。

—

プロフィール

1975年広島県生まれ。広島市立大学大学院、エジンバラ・カレッジ・オブ・アート大学院修了。「ベネチア・ビエンナーレ」（2017）で日本館の代表作家を務める。主な個展にアジアソサイエティ（ニューヨーク、2015）など。



作品イメージ

11 Ongoing Collective (日本)

場所：旧小泊保育所

奥能登口伝資料館

珠洲に伝わる昔話や怪談、うわさ話、思い出などについて住民にリサーチ。それらをもとにインスタレーションや映像、絵画、彫刻、写真、パフォーマンスなどの作品に仕立て、展示します。つまり、口伝という無形の価値を後世に伝えていく試みです。保育所を会場として用い、実存する資料館のように構成します。

【参加メンバー】

アーティスト：青木真莉子、小鷹拓郎、斎藤春佳、柴田祐輔、千葉正也、東方悠平、東野哲史、山下拓也、山本篤、和田昌宏 キュレーター：小川希、高村瑞世

ー

プロフィール

2016年に結成。東京・吉祥寺にある芸術複合施設 Art Center Ongoing ディレクターの呼びかけで集まったアートグループ。現在、メンバーは34名、ミュージシャン1名、キュレーター6名、コーディネーター4名の計45名。



作品イメージ

12 バスラマ・コレクティブ (スペイン)

場所：鉢ヶ崎わくわく夢らんど周辺

みんなの遊び場

空き地として使われていなかった場を、その土地の廃棄物を使用して、子どものみならずお年寄りも含め、あらゆる年代の人々が集う場所へと変化させてきたバスラマ・コレクティブ。地域のリサーチや周辺住民とのワークショップを通して、みんなのための遊び場をつくってきました。今回の芸術祭では、魚網やブイなどを用いて珠洲の人たちとともに《みんなの遊び場》をつくり出します。

ー

プロフィール

2001年にスペイン・マドリッドで設立されたアーティスト集団。マドリッドを拠点に、スペイン・ビルバオとブラジル・サウパウロにも事務所を構え、南米やアフリカなど世界各地でこれまで100以上のプロジェクトを手掛けている。



作品イメージ

13 エコ・ヌグロホ (インドネシア)

場所：旧蛸島駅

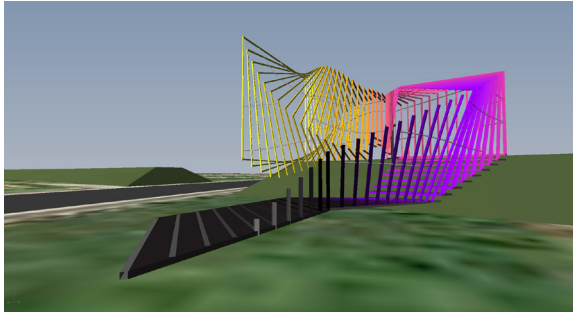
Bookmark of dried flowers

2005年、のと鉄道能登線は惜しまれつつも廃線になりました。能登線の終着駅だった旧蛸島駅に、ヌグロホは着目。戦中、日本は占領下のインドネシアで鉄道をつくりましたが、今では廃線となりました。今回の芸術祭では、インドネシアの鉄道の記録映像を見せるとともに、それに基づく壁画で旧蛸島駅の駅舎を満たす試みです。日本とインドネシアの歴史的関わりと現代を考察し、人と鉄道をめぐる物語を新たに紡ぎだすプロジェクトです。

ー

プロフィール

1977年インドネシア生まれ。「リヨンビエンナーレ」(フランス、2013)、「ベネチア・ビエンナーレ」(2013) など国際展多数参加。インドネシアを代表する美術家のひとり目される。



作品イメージ

14 トビアス・レーベルガー（ドイツ）

場所：旧蛸島駅周辺

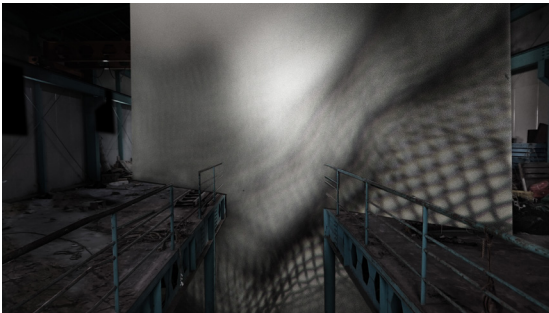
Something Else is Possible / なにか他にできる

旧蛸島駅のそばにカラフルな屋外作品を設置。小道から始まる体験型作品で、先へ進むと道が曲がりつつトンネル状に変化し、色も変貌していきます。のどかな田園風景の中に、今はもう使われなくなった、のと鉄道の終着駅と、そこに向かう線路が見渡せます。そして最後には、大きな発見があります。ダイナミックに変化する空間体験を通して、鉄道軌道跡から、かつての終着点とその風景の先にある未来を望みます。

ー

プロフィール

1966年ドイツ生まれ。2009年、ハンス・トーマ賞および「ベネチア・ビエンナーレ」で金獅子賞（グランプリ）を受賞。「横浜トリエンナーレ」（2011）など国際展多数参加。世界の第一線級アーティストの一人。



作品イメージ

15. ウー・ジーツォン（吳季璁） & チェン・シューチャン（陳淑強）（台湾）

場所：旧漁業倉庫

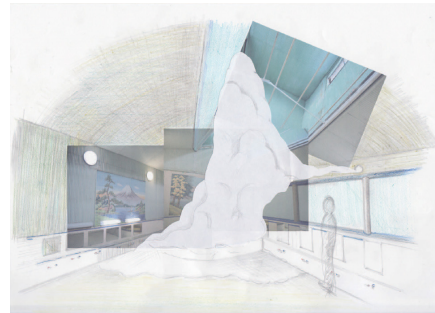
Passing

漁業用の網を補修するために使われていた倉庫にて展示。巨大な空間に天井から床まで大きなスクリーンを吊るし、その背後に倉庫の中に残されていたものでつくったオブジェとともに漁業用の網を吊るします。この網の中をライトが上下することによって、波のうねりのような、あるいは幾何学模様のようなダイナミックな動きを見せます。地域、そして宇宙との対話やつながりを思い起こさせるインスタレーションです。

ー

プロフィール

ウー・ジーツォン（吳季璁）：1981年台湾生まれ。もとは建築を学んでいたが、やがて写真や映像作品を手がける。チェン・シューチャン（陳淑強）：1969年台湾生まれ。



作品イメージ

16 麻生祥子（日本）

場所：旧銭湯（恵比寿湯）

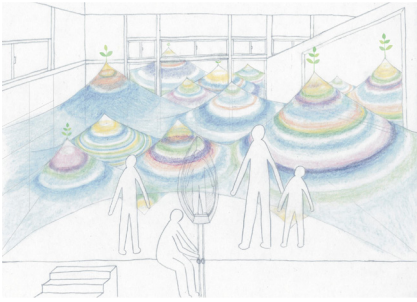
信心のかたち

恵比寿湯の創業は大正9(1920)年。海岸から神社へと向かう参道沿いに位置し、町の人からも親しまれていたものの、一昨年、残念ながら営業を終えました。麻生は、昭和27(1952)年築のこの恵比寿湯の浴室でインスタレーションを発表。見えないことを表現するような、浴槽から絶えずあふれ出る泡のダイナミックなインスタレーションを見せます。

ー

プロフィール

1982年石川県生まれ。京都精華大学大学院修了。現在は石川県在住。空の物体感をテーマに「あること」を試みる。2013年から「瀬戸内国際芸術祭」に2回連続参加。日本国内をはじめ、台湾でも活動を展開。



作品イメージ

17 井上唯（日本）

場所：旧銭湯（恵比寿湯）

into the rain

珠洲の里山里海すべてが水でつながっていることから、かつて銭湯だったこの場を再び水で満たすようなイメージで作品を展開。雨が降り注ぎ、草木が芽生え、すべてのものに水が染みこんでいく自然の営みを「染め」の技法で表現します。鑑賞者は、作品空間の中に入って楽しむことができ、鑑賞者自身が色とりどりの波紋に包まれます。

—

プロフィール

1983年愛知県生まれ。金沢美術工芸大学大学院修了。「六甲ミーツ・アート 芸術散歩2013」、「瀬戸内国際芸術祭」（2016）、などグループ展に多数参加。市民参加型の制作やワークショップ、舞台美術なども展開。

18 ひびのこづえ（日本）

場所：旧飯塚保育所

スズスカ

会場は、かつて保育所として使われていた場所。今回、珠洲の海から発想を得た衣装のインスタレーション《重力と無重力の間》を設置。さらに、ひびのが海で感じた無重力を表現したその衣装をダンサーがまとうことで、地上に新しい重力を見せるパフォーマンスを上演。さらに、この空間では稽古が行われたり、ワークショップの教室と化したりします。また、のどかな珠洲の風景をのんびり眺めることもできます。

—

プロフィール

静岡県生まれ。東京藝術大学卒業。コスチューム・アーティストとして広告や演劇、ダンス、映画、テレビなど発表の場は多岐にわたる。毎日ファッション大賞新人賞、資生堂奨励賞ほか受賞多数。



作品イメージ



作品イメージ

19 角文平（日本）

場所：本江寺の倉庫

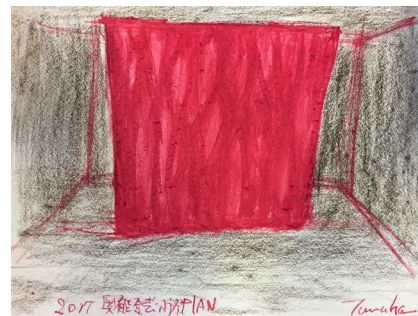
Silhouette Factory

巨大な倉庫に足を踏み入ると、そこには風景を切り取る大きな扉。天井には金属プレート製の数々の切り絵が吊され、それらは海と空を背景にシルエットとなって現れます。映し出されるのは、珠洲の風景やお祭り、特産物、伝説、交通などをモチーフにした切り絵。ゆったりと風でなびき、ストーリーが語られるかのようにな次々と絵を見せていきます。また、鑑賞者は棧橋を歩いて作品を鑑賞します。

—

プロフィール

1978年福井県生まれ。武蔵野美術大学卒業。主なグループ展に「森からはじまる物語」（福井・金津創作の森、2015）、「鉄道美術館」（川崎市岡本太郎美術館、2016）など。



作品イメージ

20 田中信行（日本）

場所：西中町の蔵

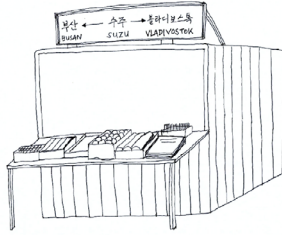
触生一原初一

田中は、アジア固有の素材である漆を一環して素材として用いてきたアーティスト。漆の物質館を通して、生命の根源や生成に関わる原初的な記憶をテーマに制作してきました。一方、奥能登は漆の産地が身近にあることも特徴のひとつ。縄文時代の遺跡にも漆が塗られた出土品が数多く発見されるなど、長い時間にわたって漆文化が引き継がれている地域でもあります。こうした土地で、漆を用い人間の原初性を思い起こさせる作品に取り組みます。

—

プロフィール

1959年東京都生まれ。東京芸術大学大学院修了。2012年、第18回 MOA 岡田茂吉賞大賞受賞。東京国立近代美術館や金沢21世紀美術館、メトロポリタン美術館、ビクトリア&アルバート美術館などに作品収蔵。



作品イメージ

21 ギムホンソック（韓国）

場所：旧珠洲駅

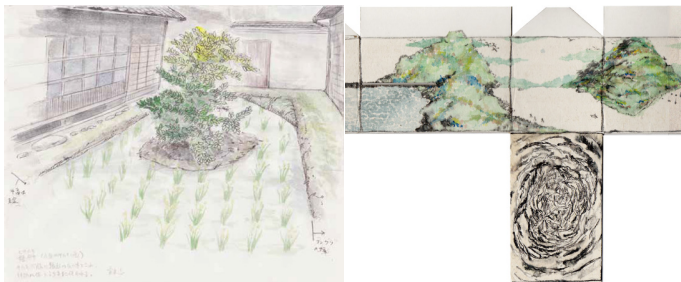
善でも悪でもないキオスク

駅や公園などにある小さな売店、キオスク。限られた空間に、飲み物や軽食、新聞や雑誌、雑貨などが並ぶ光景は、世界中のあちこちで見られます。ギム・ホンソックは、今回、このキオスクに注目。今は使われなくなったのと鉄道旧珠洲駅のプラットフォームに、キオスクを設置します。プラットフォームにあるキオスクという見慣れた組み合わせと、そこにある違和感。海の向こうの国々との関係を表現します。

—

プロフィール

1964年韓国生まれ。「ベネチア・ビエンナーレ」（2003）や「横浜トリエンナーレ」（2014）など国際展に多数参加。日中韓のアーティスト集団「西京人」のメンバーとしても世界各地で活動中。型の制作やワークショップ、舞台美術なども展開。



作品イメージ



作品イメージ

22 金沢美術工芸大学

アートプロジェクトチーム[スズプロ]（日本）

場所：古民家

静かな海流をめぐって

商店街に位置する、明治期に建てられた古民家を舞台に、金沢美術工芸大学の教員と学生の混合チームが3タイプの作品を発表します。まず、『いえの木』は、民家の蔵に残されていた膨大な「モノ」を組み上げて、天地が逆の巨木を出現。「モノ」の層や家そのものが体感できます。また、旧家の繁栄ぶりや商いの様子がわかり、かつてその家と関わった人々の声まで聞こえてくるかのような錯覚に陥るかもしれません。次に《奥能登曼茶羅》は住民から聞き取った思い出話をもとに、空家の敷地内にある蔵の内装を絵画的表現で作品化。珠洲の「地理的な時間」と「社会的な時間」「個人の時間」を渾然一体に表出されます。そして《家に潜る》と《こめにわ》は、珠洲に暮らす人々とワークショップを通して制作した作品です。前者は家屋内部の空間的魅力を引き出し、風になびくのれんを繰り返しくぐりながら、鑑賞者は家の奥へ奥へと誘い込まれます。そこから後者は、《こめのには》というタイトルのとおり、珠洲の住民から稲作について学びながら、古民家の中庭を耕し、最良の米づくりを目指すプロジェクトです。

—

プロフィール

学内の専攻分野を越えた教員と学生たちによるアートプロジェクトチームとして、芸術祭を機に結成。2016年4月から活動を開始し、フィールドワークなどを通じて地域交流を深めている。

23 鴻池朋子（日本）

場所：旧店舗

物語るテーブルランナー珠洲編

鴻池は、2014年から「物語るテーブルランナー」というプロジェクトを開始。各地で地元の人から個人的な思い出や出来事を聞き取ってランチョンマット大の下絵に起こし、それを語った本人が手芸で作品に縫い上げ、物語のテーブルランナー（テーブルに敷く飾り布）として展示します。歴史には現れず社会では表面化されない、けれども人間の内側に潜むとてもすばらしい驚くべき小さな物語に焦点をあてる試みです。

—

プロフィール

1960年秋田県生まれ。さまざまなメディアを駆使し、現代の神話をトータルなインスタレーションで表現。主な個展に「根源的暴力」（神奈川県民ホール、2015）ほか。



作品イメージ



作品イメージ

24 吉野央子（日本）

場所：旧店舗（JUEN）

JUEN 光陰

かつて、JUEN という名のスナックだった空き店舗でインスタレーションを発表。居残りのまま残された店舗を訪れた吉野は「さながら映画のセットのようで、空間はリアリティを色濃く残す」という思いを抱きました。そして、この店の在りし日、華やかかなりしころへと思いを馳せ、架空の3人をキャストした物語を設定。3つのエピソードが交差する自作のシナリオと彫刻作品で成り立つ仮想空間が出現します。

—

プロフィール

1964年鹿児島県生まれ。京都精華大学卒業。現在は彫刻家、京都精華大学教授。木彫を中心とした、場所性を重視したインスタレーション作品を数多く発表。

25 南条嘉毅（日本）

場所：旧映画館（飯田スメル館）

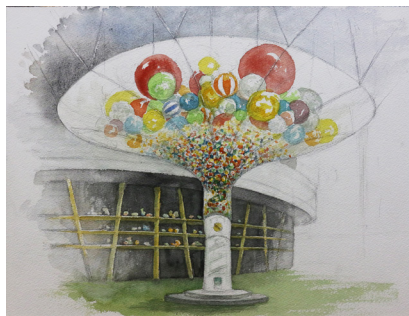
シアターシュメール

珠洲には飯田スメル館という映画館がありました。かつて大勢の人たちでにぎわった空間を生かし、そこに積もってきた時間を可視化するのが本作です。天井から珠洲名産の珪藻土の粒子が舞い落ち、客席や時を刻んできたものの上に、少しずつ積もっていきます。映画館を取り巻く記憶の蓄積と、能登半島に長い歳月をかけ降り積もった珪藻土の時間。これらを重ね合わせ、流れの違う2つの時間がもう一度現在の時間として降り積もります。

—

プロフィール

1977年香川県生まれ。東京造形大学研究科修了。「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ」（2012）やノルウェーのレジデンスに参加するほか、国内外のアートフェアにも出品多数。



作品イメージ



作品イメージ

26 力五山（日本）

場所：ラポルトすず

源流ーガチャポン交換機ー

珠洲市立の多目的ホール、ラポルトすずに巨大ガチャポンを設置。カプセルの中には、珠洲の住民から収集したものをはじめ、海岸線の漂着物やさまざまな交流にまつわるものなどが入っています。この営みは「潮流」がテーマ。人がものを「託す」「手渡す」「手放す」こと、そしてそれらがまた別の人の手に渡っていくことによって、どこまで「もの」が流れていくのか、人づての「潮流」を試みるプロジェクトです。

—

プロフィール

アーティスト集団である力五山は、加藤力と渡辺五大、山崎真一の3人によって2007年に結成。それぞれの名前を一字ずつ取って、「力五山」と名付けた。以来、「大地の芸術祭 越後妻有トリエンナーレ」や「瀬戸内国際芸術祭」など参加多数。

27 河口龍夫（日本）

場所：旧飯田駅

小さい忘れもの美術館

忘れられた鉄道、忘れられた駅、忘れられたプラットフォーム——。忘れられたりするということはどういうことか。必要として生まれた鉄道が放棄され、やがて忘れ去られることの意味について、作品を通じて問いかけます。かつて駅舎として使われていた建物を人の忘れもので満たすインスタレーションを発表。のち鉄道の旧飯田駅舎を「小さい忘れもの美術館」として蘇らせました。

—

プロフィール

1940年兵庫県生まれ。多摩美術大学卒業。「大地の魔術師」（ボンビドゥー・センター、1989）などグループ展多数。兵庫県立美術館（2007）、名古屋市美術館（2007）、東京国立近代美術館（2009）など個展多数。



作品イメージ

28 EAT & ART TARO (日本)

場所：旧レストラン

さいはての『キャバレー準備中』

食とアートを結びつける活動続けるEAT & ART TAROが、いつも準備中のキャバレーをオープン（設計：藤村龍至）。ダンスやコメディを楽しみながら多くの芸術家たちが飲み、文化の集まる場所だった、19世紀終わり頃のパリのキャバレーやカフェを彷彿とさせる作品です。日中は準備中のキャバレー、夜になると、酒と料理が楽しめます。小さなステージはダンサーやミュージシャンでにぎわい、ミラーボールも回ります。

ー

プロフィール

1979年神奈川県生まれ。調理師学校卒業後、飲食店勤務を経てアーティストに。色に関わるアートプロジェクトやワークショップを多数実施。



作品イメージ

29 眞壁陸二 (日本)

場所：寺社の舟小屋

青い舟小屋

海の近くに位置する、かつての舟小屋を活用したインスタレーションを展開。時間帯や天候によって、室内の光の状況は刻一刻と変化し、この一室は波の音と光で海を想像する空間へと変化します。眞壁は地元住民から昔の話を聞き、この構想をふくらませました。空間内部は能登の海や山、空、草木、キリコ祭りの風景などが小さな板に描かれ、瞑想空間のような絵画インスタレーションとなっています。

ー

プロフィール

1971年石川県生まれ。多摩美術大学卒業。「生と死、無と無限、混沌と秩序」をテーマに作品を制作。「瀬戸内国際芸術祭」(2010、13、16)や「SUSTANABILITY」(ロシア、2012)などグループ展参加多数。



作品イメージ

30 ラックス・メディア・コレクティブ

場所：旧上戸駅

うつしみ

のと鉄道の旧上戸駅を舞台にインスタレーション展を展開。今は使われていない駅舎のドアや窓、ブロック塀、屋根などのシルエットを線でなぞり、フレームで構成された構造物を制作。駅舎の上部にあたかも軽やかに浮遊するように、傾いて存在しています。プラットフォームと並木、田園、山並みなど周囲の環境と一体化した作品が、上戸地区に出現します。また、夜にはぼんやりと光が灯り、残像のような光を放ちます。

ー

プロフィール

1992年、ジーベッシュ・バクチ、モニカ・ナルラ、シュッダプラタ・セーングブタの3人により設立。インド・ニューデリーを拠点に活動中。現代アートの創作やキュレーション、本の制作、教育、そして場づくり等を実行。



作品イメージ

31 石川直樹（日本）
場所：旧旅館（宝湯2階）
混浴宇宙宝湯

珠洲にある現役の銭湯、宝湯。もともとは「宝座」という芝居小屋でしたが、その後、温泉がある旅館となり評判をよび、昨今では源泉かけ流しの銭湯として地元の人たちはもちろん、全国の銭湯ファンから親しまれています。この木造3階建ての「宝湯」にて、石川の写真展を開催。珠洲の各地で撮影された多彩なビジュアルが混沌とした空間内部で展開され、奥能登の知られざる歴史に触れようとする試みです。
 会場構成＝dot architects

プロフィール

1977年東京都生まれ。東京藝術大学大学院修了。辺境から都市まであらゆる場所を旅しながら、継続的に作品を発表。国内外の展覧会に参加多数。日本写真協会新人賞（2008）、土門拳賞（2011）など受賞歴多数。



作品イメージ

32 アデル・アブデスメット（アルジェリア・フランス）
場所：旧鶴飼駅
ま-も-なく

2005年から廃駅となった、のと鉄道の旧鶴飼駅。このプラットフォームで、廃列車を用いたインスタレーションが発表されます。使用される列車は、かつてこの地を走っていたノスタルジックな一両編成の車両。その内部には、車両を貫く長い直線の光によるオブジェが明かりを放ちます。そろそろ人々が忘れつつあるこの駅舎から、「ま-も-なく」何が始まろうとするのでしょうか——。そのあたりを示唆する一筋の光となりそうです。

プロフィール

1971年アルジェリア生まれ。現在はパリ在住。映像作品を中心に国際的に活躍。参加した主な国際展に「ベネチア・ビエンナーレ」（2003、07、15）、「あいちトリエンナーレ」（2010）など多数。



作品イメージ

33 リュウ・ジャンファ（刘建华）（中国）
場所：見附海岸
Drifting Landscape

地理的な条件もあって珠洲は、かつて焼き物が盛んでした。中国や朝鮮半島の文化の影響を大いに受けた珠洲焼は、11世紀に始まり、300年以上もの空白の時を経て、やがて20世紀の後半に再開されました。中国で生まれ育ったリュウは、陶器の街として知られる景德镇の陶器と珠洲焼を海岸沿いに配置。あたかも浜に流れ着いたかのような数多くの陶器群は、文化や芸術、そして両国の関係について、見る者を深い思いへと誘います。

プロフィール

1962年中国・江西省生まれ。景德镇陶磁学院で学び、卒業後、作品を発表。「シドニー・ビエンナーレ」（2010）、「光州ビエンナーレ」（韓国、2012）などの国際展参加多数。



作品イメージ

34 中瀬康志（日本）

場所：旧上黒丸小中学校

月を映す花舞台／アートキャラバン KAMIKURO

海を望む宝立山の麓の小さな集落、上黒丸。ここに位置する廃校となった学校を活用し、2種のプロジェクトを実施します。まず、《月を映す花舞台》は、校舎と森に囲まれた空間に円形の舞台を設置。森羅万象につながり、同化する異次元空間を創出します。一方、《アートキャラバン KAMIKURO》は、はしご状の構造体で移動可能なテントを中心に、地元住民を含む多様なジャンルの人々によるプログラムを行います。

—

プロフィール

1955年青森県生まれ。東京藝術大学大学院修了。国内外の展覧会に参加するほか、アートイベント「フィールドワーク・イン・藤野」（1993—2003）のプロデュースも務めた。



作品イメージ

35 竹川大介（日本）

場所：南山

海のこと山のことー左郷まわりと五芒星

「こんかつけ」とは、能登の伝統的な保存食である魚の糠漬けのこと。今回、芸術祭会開始の9月初めにリアカーに「こんかつけ」を積み、舢倉島・輪島より上黒丸を目指して米と交換をし、10月末には逆ルートで米を回収しながら輪島・舢倉島に戻ります。その記録映像を上映予定。「五芒星」は上黒丸の南山地区を起点に5つの集落を結び、それぞれの頂点にスター★ドームを設置し、海と山をこ

—

プロフィール

人類学者。沖縄やソロモン諸島、バヌアツ共和国などを主に調査地として、共同体における資源利用や紛争解決に関するフィールドワークを実施中。今回のプロジェクトは、九州フィールドワーク研究会（野研）のメンバーとともに実施する。



作品イメージ

36 坂巻正美（日本）

場所：北山

上黒丸 北山 鯨組 2017

3年前から坂巻は、旧北山分校で海と山の集落間の物々交換を題材とした「鯨談義」を開始。「鯨＝恵比寿」と「米＝大黒天」を奉るにぎやかな交流の場をつくってきました。そして今回は、鯨の頭骨を使った新たなインスタレーション作品を発表。稲作米俵に象徴される大黒天が里山へ漁神の恵比寿鯨を招くイメージで、「鯨談義」を場をつくります。また、旧校舎前の休耕田に水を入れ、海に見立てて大漁旗を掲げます。

—

プロフィール

1961年千葉県生まれ。東京藝術大学大学院修了。現在は北海道在住。主な個展に網走市立美術館（2013）、主なグループ展「上黒丸アートプロジェクト2015」など多数。



作品イメージ

37 アレクサンドル・コンスタンチーノフ（ロシア・アメリカ）

場所：笹波口、能登洲崎、珠洲川尻、正院

珠洲海道五十三次

美術家で数学者でもあるコンスタンチーノフはこれまで、古い家屋を多様な素材で包み込み、再生する作品シリーズを手がけてきました。今回は、珠洲市内のバス停を活用した作品を展開。4カ所のバス停を、その立地条件や周辺環境に応じてデザイン。素材はすべてアルミニウム・パイプで、見る場所によってさまざまな表情を見せます。また、そばには珠洲の自然に想を得た草木のモチーフも配置されます。

—

プロフィール

1953年ロシア・モスクワ生まれ。美術家、建築家、数学博士。第二アヴァンギャルド世代、ソ連アンダーグラウンド世代として、1990年以降オーストリア、ドイツ、アメリカなどで個展多数。



作品イメージ

38 Noto Aburi Project（日本）

場所：市内各所

炙り Bar

珠洲市が誇る、珪藻土コンロと手づくりの炭——この二つが生み出す炙りの楽しさと、奥能登の良さを伝える Noto Aburi Project。炭火を中心に人々が集い、ゆったりと食材に向きあっておいしく食べるといった、炙りが生み出す時間と空間を体験する場を、これまで彼らは伝えてきました。今回の芸術祭でも、炙りの経験を通して「火のあるくらし＝珠洲の魅力」を再発見するプロジェクトを実施します。

—

プロフィール

「丸の内朝大学2013年夏学期地域プロデューサークラス能登編」から生まれたプロジェクト・チーム。日本各地で「炙り場」を実施するほか、「珠洲炙りツアー」を開催するなど、炙りの情報発信を展開中。

39 鬼太鼓座（日本）

場所：旧東若山小学校

饗の事導（あえのことしるべ）

佐渡で産声をあげた鬼太鼓座が、古くから佐渡と交流のある珠洲の旧東若山小学校で講演を行います。「過剰なパフォーマンスを極限まで削ぎ落とし、演奏者が全力で打ち込む音だけが聴衆の心に響く力を持つ」という新年に基づき、鍛え上げた心身で禪をまとして、3尺8寸（117センチ）の太鼓に挑む姿は圧巻です。会期中は本公演に加えて、地元のお祭りへの参加や太鼓ワークショップを開催する予定です。

—

プロフィール

1969年に新潟・佐渡島で結成。各地の民族芸能から着想を得て、太鼓を主体とする独創的なパフォーマンスを舞台演目として確率。1970年代よりほぼ毎年ヨーロッパ、アメリカを中心とした海外公演を実施している。



作品イメージ

奥能登国際芸術祭2017 作品鑑賞パスポート 前売券販売中

「奥能登国際芸術祭2017」作品鑑賞パスポート(以下、パスポート)の前売券の販売を開始しました。パスポートで「奥能登国際芸術祭2017」のすべての作品をご覧くださいことができます。作品展示場所に入場いただく際にパスポートにスタンプを押します。すべてのスタンプを集めた方にはプレゼントをご用意しています。詳しくは後日ご案内します。

パスポート表紙



一般用



高校生用



小中学生用

	当日券 (9月3日～10月22日)	前売券 (～9月2日)
一般	2500円	2000円
高校生	1000円	800円
小中学生	500円	300円

特典

- ・チケットが必要なイベントの当日チケット料金がパスポート提示で割引になります。
- ・会期中に珠洲市内の飲食店や宿泊施設などでパスポートを提示すると各種優待サービスがあります。サービスの詳細は、パスポートか優待サービス一覧PDFをご覧ください。

※イベントについては別途入場料、参加費などが必要となる場合がございます。

※パスポートはご本人に限り有効です。

※パスポート1枚で各作品1回のみ入場いただけます。2回目以降は、

パスポートを提示すると個別鑑賞券が100円引きになります。

※パスポートの再発行、払い戻しはご遠慮ください。

詳しくはウェブページをご覧ください

<http://oku-noto.jp/ticket>

気軽に「ヨバレ」の雰囲気味わえる統一メニュー「珠洲まつり御膳」

連日のように奥能登珠洲全域で「キリコ祭り」が行われ、奥能登が一年で最も活気づく秋に開催される「奥能登国際芸術祭2017」。祭りでは、家主が自宅で御膳料理や酒をふるまう「ヨバレ」という能登特有の風習が今も行われています。そこで、気軽に「ヨバレ」の雰囲気味わえる統一メニューを「珠洲まつり御膳」と銘打ち、珠洲市内飲食店・宿泊施設で提供することとなりました。メニューや料金などの情報は、今後ウェブサイトですぐお知らせいたします。



イメージ



イメージ

現地での交通手段について

作品をしっかりと楽しみたい方は周遊バス「すずバス」がおすすめです。全4コースを回れば、ほとんどの作品が鑑賞できます。2日間の滞在で全てのコースへの参加が可能です。

全4コースに乗車できるお得な通し券もご用意しています。

周遊バスのご利用は、事前に各コースのチケットをお買い求めください。

各コースチケット：

大人1,500円、小人500円

全4コースに乗車できる通し券：

大人3,500円、小人1,500円

また、レンタサイクルやその他の交通については、ウェブサイトをご覧ください。

<http://oku-noto.jp/access/inside-suzu>

ご取材・広報についてのお問い合わせ

奥能登国際芸術祭実行委員会事務局 広報窓口

〒927-1214 石川県珠洲市飯田町13字120番地1

TEL: 0768-82-7720 FAX: 0768-82-7727

E-mail: press@oku-noto.jp



Photo: Naoki Ishikawa